

## ショック・ドクトリンに打ち勝つのは「人間の知性」

堤未果『100分 de 名著 ショック・ドクトリン』は、[はじめに]今こそ日本人が知るべき、「衝撃と恐怖」のメカニズム、第1回「ショック・ドクトリン」の誕生、第2回 国際機関というプレーヤー・中露での「ショック療法」、第3回 戦争ショック・ドクトリン 株式会社化する国家と新植民地主義、第4回 日本、そして民衆の「ショック・ドクトリン」から構成されている。ここでは最後の表題について紹介する。

一つ、注意しておきたいことは、「一番悪い敵は、誰なのか？」という思考に陥らないようにすることです。善悪二元論に陥った民衆ほど、扱いやすい存在はありません。異なる意見を持つ相手に、レッテルを貼り排除するようになったら要注意。偏見と分断は、ショック・ドクトリンを仕掛ける側にとって、甘い蜜だからです。『ショック・ドクトリン』に繰り返し登場する、メディアという強力なプレーヤーの役割を、思い出してください。9・11で、イラクで、私たち民衆は、なぜショック・ドクトリンを許してしまったのでしょうか。

今は独裁者や悪い王様など、わかりやすい敵を倒せばいいという時代ではありません。21世紀のショック・ドクトリンの最大の特徴は、敵の顔が見えないことです。見えなだけでなく、限りなく増殖していき、今日の味方が明日の敵になる。全てはお金で動いていくので、敵の顔が見えたと思っても、それはどんどん変わり、複雑に絡み合うので、追いきれません。

『ショック・ドクトリン』に出てくる多くの事例が示すように、“犯人探し”をしたくなる私たちの本能は常に、国民を分断し、攪乱し、戦うべき相手を見誤るよう、利用されてきました。

それらを読むと、今世界規模で起きている数々のショックの下でも、同じように情報が狭められ、対立を煽られ、人々が分断されていることに気づくでしょう。

物事を深く、長く、広く見る力を失い、自分の頭で考えることを放棄してしまった時にこそ、ショック・ドクトリンは牙を剥き、私たちはいとも簡単に餌食にされてしまうのです。

相手は人間ではなく、果てなき欲望を現実化するための「方法論」に他なりません。それを打ち負かせる武器はたった一つ、物事を俯瞰して眺め、本質をすくい上げる、人間の「知性」なのです。

ナオミ・クラインの『ショック・ドクトリン』を通して、勝者だけが語る物語とは別の、弱者から見たもう一つの歴史を紐解くことで、私たちは過ぎ去った時間を、味方に出来ることに気づくでしょう。

この名著を通して、一人でも多くの人が、未来を選び取る選択肢を自分の手の中に取り戻すことを、願ってやみません。

(2023年6月8日)